

記念事業

- 7/4 (土) **らいてう講座 20年を振り返って**
花岡静枝さん、杉山洋子さん、
小林典子さん (らいてうの家)
- 8/9 (日) **フェスティバル**
世界平和を願って(らいてうの家)
- 10/3 (土) **音楽詩「雷鳥の歌」**
サントミュージゼ
(上田市交流文化芸術センター)
- 11/28 (土) **記念講演 田中優子さん**
(東京ウィメンズプラザホール)

通常総会を終えて

らいてうのニュースを受けつぎ次の10年へ

おぼろげな会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

第27回通常総会は5月24日東京ウィメンズプラザで開催され、予定の議事を無事終了しました。今、日常に世界の戦争を見、日本では、武器輸出の解禁、国家情報会議設置法案が可決されるなど、平和憲法を蹂躪する事態が進行し、それに対し

て国会前で、全国各地で声を上げる人々の行動が広がっています。らいてうの家も平和を語り発信する場として求められている思いを強くします。2025年度には、企画展示のテーマを「戦後80年―平和・平等へ向かって」として、新たに「平和・核廃絶とらいてう」「日本の女性の権利は国際基準？」の2枚のパネルを制作しました。東京では、らいてう忌特別講座「小林郁とらいてうの友情」、らいてう講座「平塚らいてうと日本国憲法」を開催。らいてうの家と上田地域では、オープンセレモニー(4月26日)でバイオリン演奏とお茶席。らいてう講座は「ジェンダー平等を進める家庭教育」、音楽鑑賞会、ケルト演奏、「地元、らいてう、ゆかりの女性たち」が開催されました。森のめぐみ講座は、庭の手入れ、ハーブを楽しむ、「らいてうの家開館にかかわって」「青木村義民の里を巡る」が実施されるなど、多彩な行事を行うことができました。

また、2026年の記念事業の実行委員会を充足し、4委員会を設けて準備をはじめました。会の担い手が東京圏と上田地域と離れていること、会員の世代交代など、会の運営の困難をこの行事に取り組み過程で乗り越え、次の10年に向かつての新たな歩みを始めたいと思います。今年度、理事を退任された山田繁子さん、竹花みい子さんの今までのご尽力に感謝いたします。

来館者数は、昨年より増えていますが、過去と比べるとまだまだです。地域に根づく工夫がさらに求められています。10月の「音楽詩、雷鳥の歌」の公演に地元の高校生の参加をはたらきかける試みは、実現はしませんでした。貴重なものとした。

会のホームページは充実していると好評です。平和憲法を戦後の生のよりどころとしたらいうは、その死の前年自宅周辺を友人たちと安保反対のデモをしました。高原の自然の中、自然への感性を回復し、らいてうの家でらいてうに出会い、やすい、語り合います。(三留弥生)

今年度の役員

- 代表理事・沓掛美知子、堀江ゆり、三留弥生
- 事務局長・金輪きみ子 事務局次長・北澤有希子
- 理事・青木俊子、植草充代、金子恵、木村見江、久野泉、倉橋純子、櫻井幸子、柴田真佐子(新)、高橋小百合、藤川延子、宮下昌子、若尾伸子
- 監事・佐久間由美子、牧祐子

らいてう忌・特別講座

平塚らいてうのリアル

— 『青鞥』発刊の辞



講演する三留代表理事

らいてうの命日にあたる5月24日の特別講座は、代表理事の三留弥生さんが講師となり、「平塚らいてうのリアルー『青鞥』発刊の辞」をテーマに開かれました。（以下、三留さんのお話から）

「元始女性は実に太陽であつた。真正の人であつた」から始まる『青鞥』発刊の辞は、文庫本に換算して16ページにも及ぶ長い文章です。創刊号発刊（1911年9月）の当時はもとより、現在に生きる私たちに確かに届くものとなつていていると思われまふ。

らいてうは「他の光によつて輝く、病人のような蒼白い顔の月である」という女性の現状からの脱却を宣言します。多くの女性たちの共感を得て、大変な反響をよび、らいてう本人も驚いたようです。それにしても、115年も前に「私は、精神集注のただなかに天才を求めようと思う」「私どもは、隠されてしまったわが太陽を今や取り戻さなければならぬ」と考える、この感覚はどのように培われたのか。三留さんはらいてうの自伝をはじめ、関連する文章を読み込んで、考えて

みたこのことでした。

明（はるらいてう）が幼い頃、父は一緒にかけたたり、遊んでくれたり、良好な関係でした。しかし、母は常磐津の名取でありながら、父が遊芸の雰囲気を好まず、三味線を弾くこともありませんでした。明は父の意向（官僚の立場からの推進）で、お茶の水高女（東京女子高等師範学校附属高等女学校）に入りますが、「良妻賢母」教育に反発を覚え、修身の授業をボイコットし、数人の友人たちと「海賊組」を名乗るグループを結成し、「女性であつても、何かで身を立てたい」などと話しあいます。

成瀬仁蔵の女子教育の根本理念①女子を人として教育すること、②女子を婦人として教育すること、③女子を国民として教育すること、に心をつかまれた明は、日本女子大学校への進学を希望する。父は「親の義務は女学校だけで済んでい」と反対する。明は英文科を希望していたが、母の「家政科なら」とのとりなしで入学します。家政科に入学するが、自分が関心を持つ学習を続ける、友人の木村政子の案内で参禅に至る、自活をめざして速記を修得し、働く。

生田長江のきもいりでつくられた「閨秀文学会」に参加。回覧誌に明も小説『愛の末日』を発表し、講師の一人である森田草平から批評の手紙をもらい、親しくなる。草平と栃木県塩原に向かい、翌日保護されるが、これが心中未遂事件として報道され、父は辞職勧告されます。明は強烈なバッシングにさらされる一方、草平はこのことを題材とした小説『煤煙』を新聞に連載し、小説家

としての地位を確立します。

その後の「共同生活」「母性保護論争」「新婦人協会」「国定教科書によらない教育をと、子どもを成城学園に入れる」「消費組合我等の家」……と続き、戦後も平和運動、女性運動に邁進したらいてうの生き方は、「自分で考えて決める」「学び続ける」「行動する」姿勢そのものです。

〈本稿の筆者の感想〉

『煤煙』のくだりでは不均衡な「男女差」を感じました。私は、今でも「赤ん坊を殺害した疑いで女性が逮捕されても、逃げた男性には何の咎めもない」「事故死などで賠償金を算定する時、被害者が男児か女児かで金額が違う」などの現状があることを連想しました。

『青鞥』が何度も発禁を命じられたのは「家父長制や国体を否定する危険思想だ」といった理由でしたが、「女だけでつくっている」こと自体が目障りだったのではないのでしょうか。

生涯、『青鞥』発刊の辞」の精神が内面に生きていたと納得できる講座でした。（久野泉）



発刊の辞が載る『青鞥』創刊号の表紙。永沼智恵子（後の高村智恵子）が描いた

準備を終え 家開館



『モアラ』の演奏

お天気のいい日より、あずまや高原にある「らいてうの家」のオープン記念イベントが開催された。4月25日30名の参加者であった。参加者はステンドグラスからの暖かい季節の陽を受け、フォークユニット『モアラ』3名の心和む演奏と共に、オープンを祝った。

開館日を迎える準備の日、4月13日、14日、15日は、地域理事たちはもちろん、東京からの理事たちが集まった。NPO法人平塚らいてうの会25周年、らいてうの家20周年をしっかりと閲覧できるように企画パネル3枚を新しく展示した。小ケースには、冬の間丁寧に保管されていた「らいてうの遺品」が陳列された。三留代表理事は、開館日には、当時の記録やらいてうとの関連記事などを来館の人たちに見ていただきたいと、熱心にパネル前の小ケースの整理をしていた。

今年「らいてうの家」建設20周年記念の年、「らいてうの家」の「建物」にも新たに目をむけ

たい。そんな思いで家の内部にチェックを入れた。照明器具が建設当初と違うことを発見、また、ペレットストーブの修理を業者に依頼など準備に熱が入った。3日間の準備が終わり開館日当日を迎えた。当日は三留代表理事の熱の入った館内展示案内に皆が夢中になった。図書室には、奥村博史画伯の、劣化を修復した新しい絵画が飾られた。演奏と講話の間に、オープン日恒例のお抹茶に変わるハーブティーの香りが「らいてうの家」の自然な風を感じさせた。

7月4日(土)「らいてう記念講座」パネルディスカッション、8月9日(日)らいてうフェスティバル、10月3日(土)サントミューゼ音楽詩『雷鳥の歌』の上演企画が予定されている。東京で11月28日(土)には東京ウイメンズプラザホールにて、「記念講演」を田中優子さんをお願いした。「らいてう」についての言及が頼もしく、期待が膨らむ。(高橋小百合)

らいてうの家を訪ねる長野の旅

- ①8月8日(土) 無言館、山本宣治とタカクラテルの記念碑
 - 9日(日) 家フェスティバル参加
 - ②10月3日(土) 上田サントミューゼ・音楽詩「雷鳥の歌」を鑑賞 山本宣治とタカクラテルの記念碑
 - 4日(日) 家見学、無言館
- 問い合わせは富士国際旅行社(045-212-2201)

詳しくは同封チラシを

平和をねがって

「らいてうの家」フェスティバルを開催

8月9日(日)には、らいてうの家で「世界平和を願ってらいてうの家から」をテーマにフェスティバルを開催します。長崎忌でもあるこの日は、世界平和を願う日でもあります。上田駅から家まで、バスでの送迎をします。10時・オープニング

マルシェでは新鮮地元野菜・イワナの塩焼き・陶芸家 渡辺由理子さんの作品・仕込み味噌・手作りパン・手作り小物・レイラ化粧品・ハーブティー・書籍販売などもりだくさん。ワークショップではリリアン編みで作品を作ります。呈茶の提供もあります。



ワークショップで作る9条ブローチ・ストラップと手作り小物

午後には演奏会を開きます。コカリナの演奏(れんげ畑) トロンボーン演奏(高木夏子さん他) ティンホイッスル演奏(安井マリさん他)等 緑あふれる自然の中で楽しみましょう。8月のこの時期、らいてうの家は標高1000以上、高原の風が吹き抜ける一年でもっとも気持ちの良い時期です。皆さんの来館を心よりお待ちしております。(若尾伸子)

らいてうの家に
奥村博史の「裸婦像」を展示



今年度、らいてうの夫・奥村博史の油彩画「裸婦像」がらいてうの家に展示されました。この絵は、令孫の奥村明史氏から寄贈されたものです。らいてうの家の応接間に掛けられていたもので、当時のらいてう、博史が絵と共に写った写真も残されていました。この油彩画を博史も大いに気に入っていたとの事です。らいてうの家では、すでに「家族の肖像」、「若き日の自画像」などの博史の油彩画を展示していますが、らいてうの晩年に身近にあった絵として、ぜひらいてうの家に展示したいと考えました。

寄贈時には、包みを開けるとはらはらと絵の具が落ちるなど剝落がはげしく、確かな修復が急務と思いい、東京芸術大学の古田亮先生にご紹介ただいて、「修復研究所21」に依頼し修復することができました。絵画修復の費用の高額なことに驚きましたが、文化財の保存修復の大変さを改めて実感しました。

奥村博史は、画学生として出発しましたが多才な人でした。らいてうとの共同生活を通して役者として舞台上立って演劇活動を続け、日本初の指輪デザイナーとして指輪を製作して、デパートに展示販売する、また、詩や小説を書き、ピアノを

弾くなどしましたが、生涯の最後には、デッサンに力を入れてデッサン集をまとめようとしていました。その博史の遺志を汲んでらいてうは、博史の没後、『奥村博史素描集』を平凡社から、指輪の作品集『わたくしの指輪』を中央公論美術出版から刊行しています。

博史は、画家としての道を歩もうと1921年(30歳)のときにフランスへ行こうと準備しますが、蕁麻疹が悪化して断念せざるを得ませんでした。このときは、新婦人協会の活動の中で、らいてうの自宅を事務所にするなどらいてうの家族への負担は大きく、らいてう自身も自家中毒的な症状が悪化して、転地療養せざるを得ない状態でした。博史が乗船する予定だったその船で渡仏した裕伊之助(はな)はアンリ・マチスに学び自分の画風を探求しました。もしこの時、博史の健康が回復してフランス行きが実現していたらと思ってしまうます。博史の「裸婦像」は、らいてうの家の図書室に他の博史の油彩画とともに展示していますが、らいてうと博史の晩年に身近にあった絵としても少しゆとりのある場所での展示ができないかと思案しています。

【事務局日誌】

- 4月9日 第5回代表理事会(オンライン併用)
- 4月13日~15日 りいてうの家オープン準備
- 4月25日 りいてうの家オープン
- 4月28日 記録・出版委員会
- 4月30日 2025年度会計監査
- 5月7日 薬草の森りんどう開山式 木村、若尾、青木の各理事出席
- 5月14日 第6回理事会(オンライン併用)
- 5月24日 第27回通常総会・第1回理事会
- 5月29日 りいてう忌・特別講座「平塚らいてうのリアル―『青鞥』発刊の辞」講師・三留弥生さん(於東京ウイメンズプラザ)
- 5月29日 記録・出版委員会
- 5月30日 あずまや高原自治会定例総会 出席
- 6月5日 記録・出版委員会
- 6月7日 森のめぐみ講座①庭の草刈り・手入れ
- 6月11日 第1回代表理事会(オンライン併用)
- 6月16日 記録・出版委員会

大和田葉子さん 逝く



今年に入って、突然訃報が飛び込んだ。一昨年の9月には、らいてうの家に来館されて「また此処でフルート演奏したいわ」と言って帰られたのに。大和田さんは、軽井沢で前会長米田佐代子さんの「らいてうの家が建つ」という内容の講演を聴き、深く興味を持たれ会に入会された。「家」が建てられて早速来館されてフルート演奏をされた。その時のこと、フルートの音色に小鳥が寄って来て共に囀り出した。フルートで問いかけると小鳥が答えるという対話が出来て聴衆はたいへん感動した。ここから大和田さんとらいてうの家が深く繋がっていった。あの美しいフルートの音色をもう聞くことが出来なくなり大変残念です。ご冥福をお祈りいたします。(沓掛美知子)